

氏名	樋口里実
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第152号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉山田検校の古曲についての研究
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 萩岡松韻
（副査）	〃 准教授（〃） 浅見文子
（〃）	〃 〃（〃） 塚原康子

（論文内容の要旨）

本研究では山田検校（1757～1817）の古曲を対象とし、その伝承の現状調査と楽曲分析を通して、今まで知られていなかった古曲の実態を明らかにすることを目的とする。山田検校の独自性がみられる古曲の研究を通して、山田流箏曲の原点すなわち「あづまことうた」の世界へのアプローチにもう一つの示唆を与えることを目指した。

本研究で扱う山田検校の「古曲」とは、現在では消滅の危機に瀕している小品12曲《布袋》・《夏やせ》・《めぐりあふせ》・《あけがらす》・《葉隠》・《竹いかだ》・《かさのうち》・《相生》・《曲水》・《花妻》・《夏》・《花のかがみ》のことである。これは、山田流箏曲の規範的な歌詞集として最も流布している『山田流箏歌八葉集』（1926年）の分類によるもので、「現今概ね行はれざるものなれど、其時代々々の思想又歌曲の推移考察の資料として捨てがたきもの」との記載があるように、大正期には演奏頻度が少なくなっていた曲を古曲と分類したようだ。総じて艶のある詞章の曲が多いことから、明治期の俗曲改良の影響を受けたことに漸減した起因があると考えられるが、古曲は小品でありながらも歌詞や歌の旋律、箏の手法等に興味深い点が多く、四ツ物等とは違った形で山田検校の創造性を随所に見ることが出来る。しかし、現在までに古曲についての研究は行われていない。他の山田検校作品は大いに研究されているが、それらの曲とは異なった性格を持つからこそ、古曲も研究の対象にしておく必要があると考えた。

本研究は二章から構成される。まず第一章では、古曲の保存の現状を調査した。古曲の伝承に携わる諸派の演奏者に取材をし、現在の伝承状況を把握してみると、すでに廃絶曲と認めざるをえない曲があることや、現行されている曲も特定の会派でのみ演奏されているということがわかった。また、演奏履歴の検証によって、昭和45年以降に行われた演奏会とラジオ放送の履歴を調査したことにより、《花妻》と《夏やせ》が多く取り上げられていることが確認された。特に平成16年以降は演奏会とラジオ放送を合わせて9回の演奏履歴があり、ここ数年は古曲を耳にする契機が著しく増えている。次に、歌本に記載された詞章の変遷を取り上げたところ、江戸期から平成期にかけて刊行した5種の歌本に記載された詞章の異同を抽出し考察した結果、意図的に詞章が変えられた形跡はあまりみられなかった。録音資料については、古曲を収録した6種のレコード及びCDを取り上げたが、収録回数を見てみると、《花妻》が計5回で最も多く、聴衆の耳に触れる契機が多い古曲といえることがわかった。《夏やせ》の収録回数が2回に留まったが、《花妻》の収録回数が多いという結果は、先に検証した演奏履歴と一致している。最後に、近年出版された公刊譜と、萩岡派に伝わる五線譜について触れた。公刊譜の二冊は、平成16年と17年に発売されており、平成16年以降に古曲が取り上げられていることは、演奏履歴と同じ傾向といえる。そして、萩岡派に伝わる二世萩岡松韻作譜の五線譜には、廃絶曲といえる3曲以外の9曲が残されていることが認められた。

第二章では、楽曲分析を行った。筆者が萩岡松韻教員より教授を受けた《布袋》・《夏やせ》・《あけがらす》・《相生》・《花妻》は箏譜と五線譜に起こし分析に用いた。第二章の分析では取り上げたい箇所のみを提示したが、この5曲に関しては、箏譜・五線譜、及び歌詞を本稿の最後に添付する。また、《曲水》と《花のかがみ》は公刊譜を分析に用いた。今回はやむをえず分析を見送った5曲を除いた結果に過ぎないが、取り上げた7曲を、メリヤ斯的性格が強い曲、中歌曲の特徴を持つ曲、これらの中に位置する曲の三種に分類することができた。これにより、7曲の性格が必ずしも一貫していないということが明らかになった。

以上、伝承の現状調査と楽曲分析を通して、今まで知られていなかった古曲の実態を明らかにし、山田検校の目指した「あづまことうた」本来の姿へ迫った。古曲漸減の要因には様々な可能性が考えられるが、今一度、古曲の重要性を認識し、誰しものが演奏することが出来るような状況になることができれば、山田流箏曲のレパートリーとして回帰し、演奏者の立場から見た山田検校作品に対する見解が変わるだけでなく、聴衆が山田流箏曲に抱く印象も変わってくるのではないだろうか。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、山田検校(1757-1817)の古曲を対象に、伝承状況の調査と楽曲分析を通して、その実態を明らかにすることを目的とした研究である。

この研究のために、これまで考察及びレッスンをした曲は「布袋」「花妻」「初若菜」「夏やせ」「新七草」「花暦」「明鳥」「相生」「芙蓉の峰」「あづまの花」であり、これらの曲は秘曲稀曲と言われ、どれもあまり伝授演奏しないものとなっており、昨今においてはそれらの曲を伝承する演奏家が少なくなり、初めてこの度のような東京芸術大学博士課程においてレッスンのカリキュラム、また研究の一環に加えたものであり、この度の研究は大変意義深い論文となった。特に各楽曲の考察、流派による歌詞の異なりなど、細部にわたって良く研究なされていた。また各流派の伝承者に対して訪問調査を行い、各々の口伝を検証した。そのうち「布袋」「夏やせ」「明鳥」「相生」「花妻」の5曲は五線譜に書き表しており、後進に対しても意義の深い内容を示した。総合して論旨も明快になされており、よくまとめられた論文となった。

演奏においては、去る1月29日に最終リサイタルとし、博士学位審査会が行われた。内容は、歌唱力並びに箏の奏法のレベルともにプロの演奏家の域に達し、聞きごたえのある三曲であり、審査会のみならずリサイタルとしても興味深い選曲だった。山田流歌曲に必要な河東節、萩江節などの他邦楽の発声法を巧みに取り入れ、曲趣に応じた魅力を引き出していた。また秘曲稀曲と言われる曲は、ともすると雰囲気は捕われてどの曲も同じ曲調になりがちだが、各々に合わせ笛などをあしらい、その曲の味わいを表現した。ただ歌唱にもう少し華やかさがあれば尚良かったように思われる。今後の更なる歌唱法の研究を望みたい。

以上を総合して、協議の結果「(削除)」と判断した。